

吉川英梨さんの「海蝶」＝講談社、1600円（税別）＝の刊行に合わせ、本紙では次号から「海蝶ノート」が連載開始される。吉川さん自身に新作と新連載への思いをつづってもらった。

ち密な取材、高いエンタメ性

海上保安庁を舞台とした小説が刊行されました。海保初の女性潜水士を主人公に、同じく潜水士である父や兄との家族の絆や組織の仲間たちとの友情と絆を、正義仁愛の精神を基底に描く海洋冒険小説です。作者は、海上保安友の会理事の吉川英梨さんです。

過去に、海上保安庁を扱った小説は何作かありましたが、今回の作品はシリーズ化を想定しています。海上保安協会では、この小説を媒体として、海上保安活動の普及啓発に、そして学生募集の具体的成果につながればと、吉川さんの取材に協力してきました。

後の年に出版に携わった「海難救助のプロフェッショナル海上保安庁特殊救難隊」（成山堂）が紹介されています。

一気読みし、エンタメ性はもちろん、ち密な取材を伺わせる東京港の情景描写や特殊救難隊08の寄稿を参考にしたのではと思わせる救助活動の様子には運命すら感じ、第二の「海猿」を探し出した、と確信するほどの感動でした。

そこで、発行直後ということで、たまたま入っていた読後感想を求めるチラシ（たまたまだったことは後に知りました）に記載されたアドレスにメールしたところ、後日、吉川さんご本人から返信をいただき、友の会理事就任のお願いをした次第です。

当時、吉川さんは複数の警察小説シリーズの他、単行本などで、執筆スケジュールは2年先までビッシリと埋まっており、海保小説の具体化は見通せませんでした。それでも、本庁広報室の調整で実現した、「海底の道化師」にも登場する羽田航空基地、特殊救難基地や海上保安試験センターなどの現場取材が功を奏し、海保小説の具体化が進みました。

今回の小説化は、取材対応していただいた全ての関係者様のおかげであり、海上保安新聞では、その取材に報いる意味も込め、吉川さん視点での海保現場の取材の様子などを次週からお伝えすることとします。

（海上保安協会常務理事・宮野直昭）

「そのセリフ、もらった！」

愛とともに 親子で活躍する保安官の話から誕生した『海蝶』

吉川英梨さん寄稿

9月1日、講談社より『海蝶』という書籍を発売いたしました。

海上保安協会の宮野直昭常務より「海上保安庁の話も書いてほしい！」と言われて約2年。この海上保安新聞を毎週コツコツと読みながら、少しずつ海上保安庁という組織を勉強し、主人公や物語の設定を考えてきました。

ある時、親子で活躍する海上保安官の記事を見ました。

「よし！ 親子で海上保安官だという話にしよう」

ある時は、史上最年長として人事院総裁賞を受けた潜水士の記事を読みました。

「よし！ 父親は史上最年長の潜水士ということにしよう！」

取材先で、転勤の苦労話を聞いた時は、

「よし！ そのセリフ、もらった！」

こんな感じで、物語の骨格を作り、肉付けをしていきました。

そして出来上がった主人公が、海上保安庁初の女性潜水士、忍海愛。父親は史上最年長潜水士の正義。兄は特殊救難隊員の仁。

そう、『正義仁愛』です。

彼女は、海上保安官になることが当たり前のような家族で育ちます。史上初の女性潜水士として、その血筋はお墨付き。

しかしいざ現場に立った時、

その現実のあまりの厳しさに、何度も心が折れそうになります。しかも不可解な海難事件に巻き込まれてしまいます。やがて彼女を襲う、東日本大震災のトラウマ……。

実際の執筆は今年の2月。この時私はもう、気分は真夏の八丈島沖の海。しかしバカンスで

はありません。海難救助がその使命です。私はキーボードを叩きながら、愛とともに筋肉を震わせ、愛とともに歯を食いしばり（そして知覚過敏になってしまった笑）、愛とともにブラックアウトの恐怖にパニックになり、愛とともに悔し泣きをしました。

巡視船「いず」船橋で取材する吉川さん＝今年2月



連載エッセイもお楽しみに！

そして最後は、愛とともに。『正義仁愛』を貫いた末に見えた水天一碧の空に、心を震わせました。

登場人物は、みないい人です。私が取材でお会いした海上保安官のみなさんが本当にみな「いい人」だったからです（笑）。

え？

そうじゃないのもある……？ それならぜひ、私のツイッターにこっそりDMください。本作はシリーズ化予定です。次の作品では悪い海上保安官も書きたいな。

来週から『海蝶ノート』として、エッセイの連載もスタートします。お楽しみに！

海上保安新聞



吉川さんを友の会理事にお誘いしたのは2018年秋です。海上保安友の会活性化のため、新たな理事候補を探しているときに、友の会監事の岩尾克治さんに吉川作品を紹介され、週末に「新東京水上警察」既刊4冊を一気読みしました。

この年の夏に刊行された「海底の道化師」には、特殊救難隊や元特救隊員の女性海上保安官が警視庁の水難救助隊員として登場しています。作品の参考文献の一つには、わたしが現役最